

ムクターバーイーは誠実な探究者を導く インドの古典物語から

ディーパーヴァリ、光の祝祭の日に、ムクターバーイーという名の少女が大切な用事で村の中心に向かって急いでいました。彼女はこの祭日のお祝いに、家族のためにプーランポーリという甘いケーキを作るつもりでした。彼女の母親と父親は亡くなっていたので、ムクターバーイーは自分と3人の兄たち——ニヴリッティ、ニャーネーシュワラ、そしてソーパン——のためにこの特別な食べ物を作りたかったのです。プーランポーリを作るのは初めてだったので、それを焼くための陶製の平鍋を買う必要がありました。

ムクターバーイーは村の他の少女と同じように見えたかもしれませんが、しかし周囲の人には知られていませんでしたが、彼女は3人の兄と同様、シッダ、すなわち悟りを開いた存在でした。この若い真理を知る者は、ディーパーヴァリの間の人々の顔に輝いている友情や善いことを願う気持ちを嬉しく思いながら、アランディの村の中を笑みを浮かべて歩いていました。村の通りは、祭日のために果物やお菓子を買いに来た人たちでにぎわっていました。ムクターバーイーに出会った誰もが、陽気なあいさつを返しました。彼女が村のブラーミンで最も著名なヴィショーバ・チャーティーに遭遇するまでは。

この男は村の長老の一人で、正統派の慣習を厳格に守ることで神への切望を表していました。アランディの聖職者カーストの多くの者と同じく、ヴィショーバはムクターバーイーとその兄たちを好ましく思っていないでいました。なぜなら、彼らの父、ヴィッターラパントは若い時に結婚し、やがて不満を感じ、僧侶になるために妻と別れました。ヴィッターラパントのグルはそれを知ると、この若者に家庭生活に戻るように指示しました。妻は彼と会えて喜びましたが、村の伝統的なブラーミンたちは違いました。彼らは、どのような理由であっても僧侶であることを放棄する

のは異端であると感じ、彼らの目にはその若者の過ちは彼の家族全体に暗い影を落としたと映ったのです。

ムクターバーイーが村の中を自由に歩いているのを見た時、ヴィショールバはこの少女は大人と一緒にいるべきだと感じました。それが地元の慣習だったからです。「この家族はいつも何か間違ったことをする。やれやれ、私が何とかしなければ」と、彼はブツブツ文句を言いました。彼は少女に尋ねました。「どこへ行くのだ」

「ディーパーヴァリのための甘いケーキを作る平鍋を買いに行きます」と、ムクターバーイーはブラーミンにほほ笑み掛けながら言いました。

ヴィショールバは満足しませんでした。「おまえのような少女は一人きりで村を走り回るべきではない」

「私は一人で村の中を歩くのは大丈夫です」と、ムクターバーイーは言いました。「このみんなは私を知っています。そして兄たちは私がここにいるのを知っています」

ヴィショールバは、「年長者に口答えするな」と憤慨しました。

ヴィショールバが誠実な探究者であると知っていたムクターバーイーは、彼に大きな哀れみを寄せました。彼が宗教的な不寛容を克服し、理解を広げることを助けるような方法で返答したいと思いました。しかし少女が話すより前に、ヴィショールバは通りを急いで行ってしまいました。少し後、ムクターバーイーは再び陶製品の店に向いました。彼女が到着すると、ヴィショールバが店を出て行くのが見えました。なぜ彼はそこにいたのでしょうか。彼女はすぐに分かりました。

陶工は彼女に平鍋を売ることはできないと言いました。彼女は彼の弁解に辛抱強く耳を傾けました。——すでに大量の鍋の注文を受けており、彼自身の妻ももう一つ鍋が必要であり、彼は子ども相手には商売できない。仮にも彼女が家に帰る途中で鍋を壊したらどうするのだ——など。

ムクターバーイーには、陶工が拒絶した陰の理由はヴィショールバなのだと分かりました。有力なブラーミンは、彼女が必要としていた平鍋を売ることがを恐れさせようと、店主を何らかの方法で脅したに違いありません。その時点で自分にできることは何もないと分かったので、ムクターバーイーは家に帰り、兄たちが帰って来るのを待ちました。

上から2番目の兄、ニャーネーシュワラが、最初に帰って来ました。彼はムクターバーイーが戸口のそばに座っているのを見つけました。彼女は彼に平鍋を買いに行った時の話をしました。「ヴィショールバは、陶工が私に平鍋を売ることがを止めなくてはと感じたようです」と、彼女は言いました。「そして平鍋がなくては、私はディーパーヴァリのための甘いケーキを作れません」

ムクターバーイーが話している時に、ヴィショールバが子どもたちの家の窓に忍び寄りました。恐らく、彼は行き過ぎたことをしてしまったと心配したのかもしれませんが…あるいは、新しい平鍋が手に入らなかったことに子どもたちがどう対処するかを単に見たかったのかもしれませんが。いずれにしても、彼がそこで見たものは、彼の人生を変えました。

少女と兄は、ブラーミンが見ていることに完全に気づいていました。そして彼らは、彼が新しい理解を得る手助けをしようと、言葉を交わすことなく同意しました。

それから、ニャーネーシュワラは言いました。「しかしムクタ、なぜおまえはプーランポーリを作るのに平鍋が必要なのだろうか。おまえは私の背中の上でケーキを作ることができるよ！」

「彼の背中でケーキを作るなんて！」。びっくりしたヴィショーバが見ていると、ニャーネーシュワラが四つんばいになってじっと動かずにいる間に、ムクターバーイーは彼の背中の上に生地を小さい円形になるように注ぎました。ケーキは熱でジュージュと音をたて、彼女がそれを1度ひっくり返すと、きつね色になりました。間もなく、ムクターバーイーのそばに置かれた皿には、カリッとした熱々のケーキが積み重ねられました。

ヴィショーバは、自分が神聖な奇跡を目撃したこと、そしてそれはニャーネーシュワラによってもたらされたことを知りました。ブラーミンはその若者を新たな目で見ました。もはや宗教的な偏見で我を忘れることはなく、彼はニャーネーシュワラのほほ笑みの中に英知と慈悲があることに気づき始めました。ヴィショーバの気づきが呼び覚まされると、ニャーネーシュワラはシッダに違いないという考えが彼に生じました。ヴィショーバ自身は、この悟りの境地を達成しようと長年にわたって努力してきましたが、それは実現していませんでした。「この若者は私と同じ村で、その全生涯を送ってきたのだ」と、ブラーミンは思いました。「長い間、私には彼の偉大さを見る目がなかったのだ」

ムクターバーイーは料理しながら、ヴィショーバのあえぎを聞きました。そして窓越しに呼び掛けました。「ヴィショーバ、あなたですよ？ 今ちょうどプーランポーリを作り終えたところです。中に入って食べませんか」

家に入って来たのは変容を遂げたヴィショーバでした。両手を合わせてナマスカールの形にし、ニャーネーシュワラに言いました。「私はあなたからたくさんを学ぶことができますと分かります。どうか私をあなたの弟子にしてください」

ブラーミンを招き入れたのはムクターバーイーであったのに、彼は彼女には礼を言うことさえありませんでした。ニャーネーシュワラはほほ笑み、そして悟りを開いた師の完全なる慈悲をもって妹を示し、ブラーミンにこう言いました。「あなたは彼女の生徒になることができます」

ヴィショーバは、口をあんぐりと開けました。この少女が！ 私のグルになるとは！ しかし彼女の賢明な優しい瞳をのぞき込んだ時、認識のひらめきがありました。この博識な長老は、子どもであるにもかかわらずムクターバーイーもまた悟りを得た存在であること、そして自らの心が彼女への敬愛に満たされるのが分かりました。

ブラーミンは、村の通りで叱ったばかりの少女に恭しくお辞儀をして言いました。「今朝の私の振る舞いをお詫びいたします。どうか私をお許してください。そして私をあなたのつつましい弟子として受け入れてください」

ムクターバーイーは彼の真心からの切望を認め、優しくうなずきました。長い時間をかけて、ムクターバーイーの恩恵を通して、そして彼女の指導に従うことによって、ヴィショーバは大いなる自己の実現を達成しました。そして、彼自身も他の偉大なる聖人たちのグルとなりました。

この日、ヴィショーバはムクターバーイーの家族のディーパーヴァリの祝宴に加わり、誰よりもプーランポーリを味わったのです！



再話 : Rachana Karron
挿画 : Lucilda Dessardo Cooper